

もう一人の「ドイツ的」作曲家

—W. ニーマンによる伝記で描かれたブラームス像—

石井 萌加 (東京大学)

本発表では、ドイツの音楽評論家、作曲家、ピアニストであった W. ニーマン (Walter Rudolph Niemann, 1876-1953) が執筆した、作曲家ヨハネス・ブラームス (Johannes Brahms, 1833-1897) の伝記 (W. Niemann: Brahms, 1920.) を扱う。ニーマンの伝記の中でブラームスが、過去のドイツの作曲家をいかに引き継ぎ、ドイツ民族の精神生活を支える存在としていかに記述されているのかを明らかにする。特に注目すべき点は、ニーマンがブラームスを、ヴァーグナーとは別の側面から「ドイツ民族」を象徴する作曲家として評価している点である。ニーマンによれば、外向的でドラマティックなヴァーグナーの作品とは対照的に、ブラームスの作品は、内に熟練した内的なものである。そして、そのようなブラームスの音楽がもしヴァーグナーの音楽に吸収されてしまっていたら、ドイツの音楽生活は一面的なものになってしまっただろうと述べる。この主張を裏付けるためにニーマンは、ブラームスの作品を扱う章において、バッハやヘンデル、シューマンなど過去のドイツの作曲家を挙げ、ブラームスがドイツ音楽の「最後の偉大な代表者」であったことを論じる。

発表者はこれまでに、ブラームスの出身地であるハンブルクで 1933年5月に行われた生誕100周年記念音楽祭の関連記事を分析してきた。ナチスが政権を奪取して3か月あまりであった当時、「退廃」音楽に対抗しドイツの純粋な遺産を守る作曲家としてブラームスが記述されることがあったことを明らかにした。ニーマンは、1933年5月7日の新聞 *Hamburger Nachrichten* にてブラームスについて人種主義的な表現を用いて記述し、ブラームスこそが最もドイツ的な作曲家であると述べた人物である。それに先立って執筆した自身のブラームス伝においてニーマンがブラームスを「ドイツ(民族)の精神生活」の一側面として評価したことは、後のナチス体制下で唱えられた、「退廃」音楽に対抗しうるドイツの純粋な遺産としてのブラームス、という人種主義思想の影響を受けた作曲家像に通じる。

20世紀前半のドイツでは、ナショナリズムが人種主義思想と結びついていた。ブラームスの受容研究においては、そのようなナショナリズムとブラームス像との関係性は見過ごされてきた。このような問題意識のもとで発表者は、20世紀前半のドイツで、ブラームス像が人種主義思想の影響をいかに受けていたのかについて研究している。ブラームスがドイツの作曲家の系譜の中でどのように位置づけられているか、という観点から伝記を分析することで、ニーマンが1933年に提示した人種主義的な作曲家像の形成過程を明らかにできる点が、本発表の意義である。